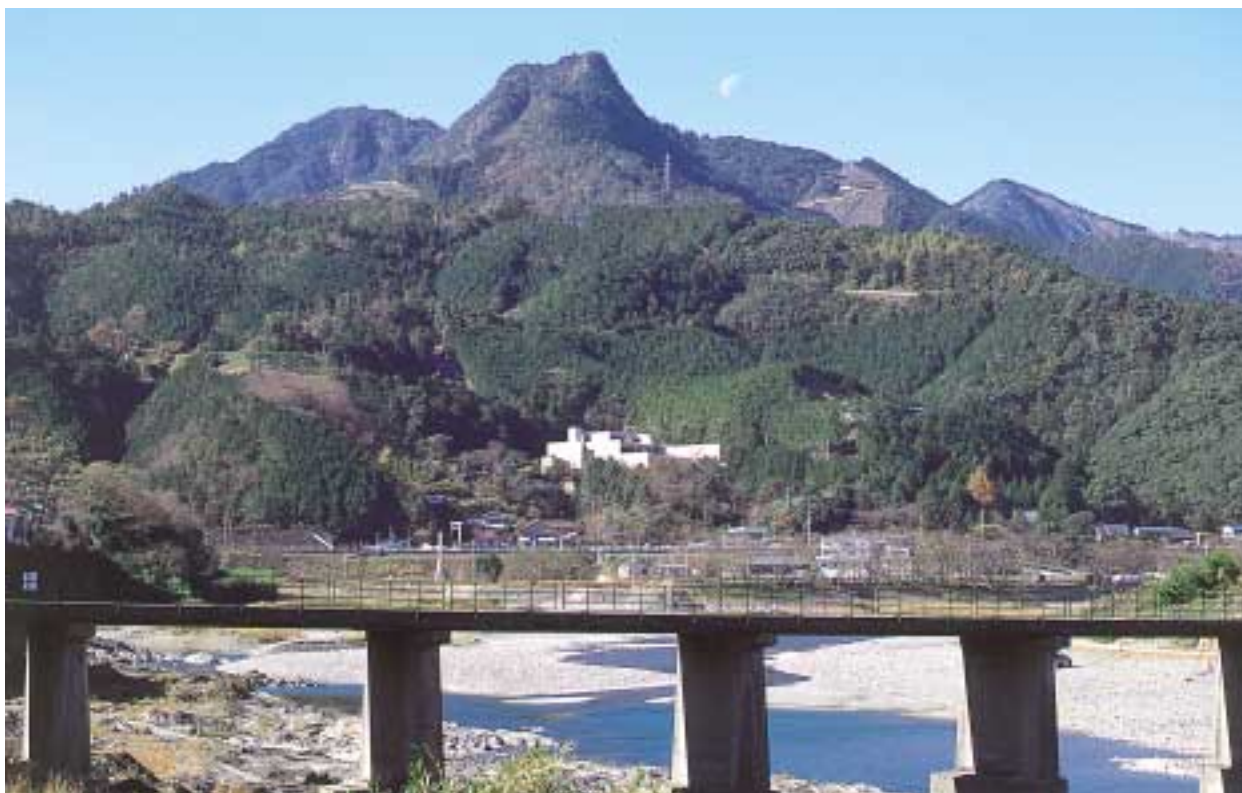


## —開館10周年記念号—



### 風物の融合

越知町は、何よりも自然が豊富なことが最大のセールスポイントである。中でも、町のシンボルである「横倉山」は、いかにもその姿が神秘的で、常に町全体を見下ろし見守ってくれているような存在である。山容にふさわしく、実に約4億5000万年前の日本最古の化石を産し、4億年前はオーストラリアや南極大陸の近くにあったサンゴ礁から成る小さな大陸の一部であったと言われている。また、日本屈指の植物の宝庫で、世界的な植物学者・牧野富太郎のフィールドでもあった。さらに、地形が急峻で険しい岩場が多い所為か、800年以上の昔は土佐国唯一の修験道の霊場として栄え、各所に遺構が残りその面影を今に伝えている。時を同じくして、源平の屋島檀ノ浦の戦いに敗れて四国に上陸し、ここを終焉の地とされた幼帝・安徳天皇の陵墓参考地や平家伝説にまつわる“遺構”があり、正に山全体が神秘とロマンに包まれている。

次に挙げられるのが、清流・「仁淀川」である。色とりどりの石が河原を埋め尽くし、生物的・化学的な調査からも“非常にきれいな”水質を誇る川である。アユ釣り、キャンプ、カヌー下りなど、国交省の調査によると“水辺利用率全国一”と言

われている。この仁淀川には、昔懐かしい「沈下橋」が9基架かっており、そのうちの3基が越知町内にある。どれも個性のある大変趣のある橋である。写真中の「中仁淀橋」は、中でも橋脚が高く、平常の水面から約9mもあるが、度々冠水する。

仁淀川の旧河川敷にあって『コスモスまつり』の会場となるのが「宮の前公園」である。ここには、コスモスオーナーが育てる約100万本のコスモスが咲き乱れ、まつりの期間中（9月下旬～10月中旬）は、出店、カラオケ、野点、花馬車などの催しがあり、10万人もの人々で賑わう。

最後に、横倉山山麓に仁淀川を眼下に見下ろすように立つのが、「横倉山自然の森博物館」である。世界的建築家・安藤忠雄氏の設計によるもので、高知県の中山間地域における有数の規模の公共施設である。横倉山をテーマとし、ここから産する4億年前の化石や植物、歴史的資料を展示・保管し、普及活動と共に地域の歴史を語る貴重な資料を後世に継承していくための学習施設である。

これら、4つの越知町を代表する風物が融合し、同時に見られるのが、この表紙写真のポイントである。

## ごあいさつ

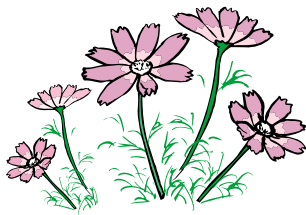


越知町長 吉岡 珍正

平成9年10月11日にオープンニングセレモニーを行って以来、本年10年目を迎えることとなりました。その間、多くの皆様のご協力、ご指導をいただきましたことに対し、心より感謝とお礼を申し上げます。自然豊かな横倉山の麓に、世界的に有名な安藤忠雄氏の設計による、素晴らしい博物館が誕生した時の感激を昨日のように思いおこしています。

開館以来、多くのお客様を受け入れた施設でありましたが、他の多くの博物館にみられると同様に、訪れる方が徐々に減少して参りました。職員の方をはじめとし、関係者のお力添えをいただき、何とか現在に至っておりますが、今後財政面において、入館者が増加しない限り維持していくのは困難になって参ります。特に、町外の方はともかく、町内の皆様の来館が少ない現状を考える時、なおさら不安を感じるどころです。

しかし、「横倉山自然の森博物館」は、後世に残せる越知町の文化遺産であります。英知を結集し、厳しい現状を打破して参らねばと思っています。今後とも住民の皆様や、関係者のあたたかいご尽力、ご支援を心よりお願いしご挨拶と致します。



館長(教育長) 西森 耕治

平成9年10月11日に博物館がオープンして以来、先人の皆様方のたゆまぬ努力とご支援をいただき、今年で10周年を迎えることができました。

世界的建築家・安藤忠雄氏による設計ということで、当初から注目を浴び、平成10年には、高知県の風土に新しい息吹を与え高知の存在感を高めたということで、高知県知事から『第2回高知県新しいなかデザイン賞』の「建築物・建造物の部大賞」を受賞しました。

この博物館を拠点として、今日までさまざまな事業に取り組んできたなかで、当館は高知県内唯一とも言える自然系の公立の学習施設として、地元の子供たちはもちろん、県内外の子供たちの総合学習や遠足等に利用してもらい、また、夏休みのいろんな教室や企画展の開催に参加していただくなど、当館としても高知県の社会教育に少なからず貢献してきたのではないかと、自負しているところです。

これからも、これまで培われてきた実績を礎として、多くの人々に見守られながら、一步一步博物館の歴史を刻み続け、郷土の歴史を伝える貴重な資料を展示・保管し、確実に後世に継承するとともに、広く一般に公開し、学習に役立ててもらおうよう普及活動の役割を果たして行く所存です。

最後に、こうして歩んでこられたのも、ひとえに、地元の皆様、教育関係者、ボランティア等の方々のご理解とご支援、ご協力の賜と心から感謝致している次第でございます。

## 横倉山系植物調査奮闘記

大 倉 浩 典

横倉山系は標高1,000m余りで、古くから修験道場や安徳天皇<sup>せんこう</sup>潜幸伝説に基づく史跡や4億5000万年前の日本最古の化石をはじめ数々の貴重な化石を産出、また、史跡により保護された原生林に

近い自然林に育まれた豊富な植物というように、一つの山で史跡あり、化石あり、豊富な植物ありと三拍子揃った山は全国的にも珍しいと思います。しかも平成9年には、横倉山の麓に世界的建築家・

安藤忠雄氏独特のふだんに自然を取り入れた、モダンで開放的な素晴らしい「横倉山自然の森博物館」も完成しました。

「横倉山」の名前は高知県内では余り知られていないが、植物研究家の間では早くから有名です。世界的植物学者・牧野富太郎博士が、13歳（明治7年）頃から本格的に植物の研究を始められ、明治14年4月、20歳で最初に上京した際、東京博物館に田中芳男博士を訪ね、それまでに調べた植物をまとめた『土佐植物目録（図録）』をお見せした所、田中博士はその出来栄（えきば）えに大変驚かれ、県を単位とした植物調査はこれが最初です、と絶賛され、是非とも研究を続けるようにと激励されました。そういうこともあって、明治17年7月、23歳で二度目の上京をするまでの3年間は、殆ど毎日のように横倉山に通い、植物採集をして『土佐植物図録』の充実に努められたようです。従って、牧野富太郎先生にとって最初の論文となったと思われる『土佐植物図録』に収録された植物の大半の採集地は「横倉山」となっており、明治の中頃からすでに“土佐に横倉山あり”とその名が知られるようになったようです。

横倉山は高知市内から車で約1時間、標高600mの第3駐車場で車を降り歩いて15歩、平成2年建立の横倉宮大鳥居を潜ると、もうそこから先は原生林を思わせるような別世界、目の前左手には、推定樹齢500年、幹廻り4.75mの「アカガシ」の巨木が登山客を出迎え、遊歩道すぐ右手林床には、落葉の間に高知県植物版レッドリスト絶滅危惧I B類の「ウスギムヨウラン」の群落が、少し登ると遊歩道右側に接して、絶滅危惧I A類で横倉山をタイプとする「フジキ」が、更に歩を進めて杉原神社手前の杉林の落葉の中には、絶滅危惧I A類で横倉山がタイプの「コオロギラン」と絶滅危惧I B類の「ヒナノシャクジョウ」が混生し、登山口から歩いて15分、杉原神社の境内には幹廻り4.0~7.0mの「スギ」の巨木に囲まれて、横倉山がタイプの「ホソバハナタデ」や「アオテンナンショウ」が、神社裏手の幹廻り4.65mの「モミ」の巨木（残念ながら平成17年11月19日伐採）には絶滅危惧I A類の「ヤシャビシヤク」が着生すると言うように、横倉山には、横倉山をタイプとする植物が絶滅したものも含めて31種、絶滅危惧I



住吉から見た馬鹿試し  
（頂上に牧野博士の発見・命名による黄葉したヨコグラノキが見える）

類の植物だけでも35種あり、横倉山は現在でも植物の宝庫です。

牧野富太郎先生が、横倉山で本格的に植物調査を始めた明治7年から今年で133年、その間大勢の人達によって植物調査が続けられておりますが、いずれも断片的な調査で、まとまった調査としては私の知る限りでは唯一、高知県教育委員会が昭和35年3月、高知県文化財調査報告書第11集で「横倉山」を特集した時、たまたま私の父（大倉幸也）が『横倉山の植物』を担当、昭和8年から昭和35年までに集めた断片的な調査資料をまとめて、シダ植物109種・種子植物615種、合計724種を『横倉山植物目録』として報告しておりますが、報告書の中で本人も断っているように、植物目録としては極めて不十分で、今後の調査で更に完全なものにしたいと書いてありますが、息子として知る限りでは、その後補足したようには思われません。

私は平成10年に65歳で勤務先を退職と同時に持病の心臓の“大修理”を行い、最終的にはペースメーカーまで埋め込み1級1種の“資格”も取得、術後のリハビリと体力回復を兼ねて横倉山を歩いてみた所、遊歩道の完備した横倉山なら何とか歩けることが判り、立派な博物館もできたことだし、親父のやり残した“宿題”の補いでもしようかと、平成12年から親子二代にわたる横倉山の植物調査

が始まりました。

都合よく、平成13年から高知県立牧野植物園に本部を置き、『高知県植物誌』作成のため高知県全体の植物調査が始まり、これ幸いと横倉山専門の地域調査員にしてもらい、以来今日まで、年間を通して2週間に3回位の割合で横倉山に入り、片っ端から植物を採集し標本にして本部に搬送し、横倉山を含めた須崎地区の植物として登録・同定していただく一方、標本の一部は『横倉山系植物目録』の証拠標本として横倉山自然の森博物館で保管しております。

今年は博物館開館10周年ということで、横倉山での植物調査の中間報告をしますと、この8年間で、横倉山系で確認できた植物は1120種、内訳はシダ植物147種・木本植物297種・草本植物676種となりますが、これ以外にも、過去に採集記録のある植物や周囲の状況から考えて、横倉山にもあって不思議でない植物で現在未確認の植物がシダ植物で33種・木本植物で23種・草本植物が93種あり、これらを全て確認できれば、横倉山系全体の植物は1269種となり、高知県全体の植物の3分の1強の植物を横倉山系で見ることができ、やはり横倉山は植物の宝庫と言えそうです。

平成16年8月30日、台風16号が上陸、県下全域に多大な災害の爪痕を残しましたが、横倉山も同様で、特に南斜面や“馬鹿試し”から畝傍山眺望所の間の谷筋は、強風が吹き抜け、巨木・古木が薙ぎ倒され惨憺たる状態で、横倉山がこの後どうなるかと心配しておりましたが、怪我の功名と申しますか、横倉山の樹は巨木・古木・高木が多く普段は余り花をつけず、標本作りに苦労しますが、翌年の平成17年は、前年の台風16号で樹が痛み付けられたためか、大袈裟に言うと全ての樹が花を咲かすという状態で、木本類の植物採集が随分捗りました。特に感激したのは、横倉山がタイプで絶滅危惧ⅠA類の「フジキ」。それまでも随分探しましたがどうしてもみつからず、横倉山では消滅したのかと諦めかけていた時、平成17年6月8日第2駐車場で車を降り、何気なく山を見た所、駐車場から数メートル入った雑木林の中で、探し求めた本家横倉山の満開の「フジキ」を発見、こんな近くにあったのかといささか拍子抜けしましたが、更に幸運なことに、この「フジキ」は数十年前に

台風か何かで横倒しになり、それでも枯れずに生き残り、根元から10メートル位の所から幹の先端が立ち上がり、5メートル程伸びた所で花をつけており、比較的簡単に花つき・実つきの立派な標本を作ることが出来ました。なお、「フジキ」は第2駐車場から第3駐車場の間の山中で11本確認できましたが、いずれも樹高が15メートルから20メートルの高木で、とても花つきの枝は採集できませんでした。なお、花が咲いたのは平成17年だけで、去年も今年も花は咲きませんでした。また、この年には、今まで探しても見つからなかった、県内では非常に自生地の限られた絶滅危惧ⅠA類の「ヤマホオズキ」が突然馬鹿試しから平家穴に下りる小道の両側で大発生、これも前年の台風で周囲の木々が薙ぎ倒され、今までと違って日当たりが良くなったためと思われる。

平成13年5月、当時の博物館館長の堀見矩浩先生から、一人では植物調査も大変でしょうと、“越知町の牧野富太郎”と言われていた越知小学校6年生の岡部優君を紹介され、早速『高知県植物誌』の事務局には最年少の調査サポーターとして登録、学校の休みの日には二人で植物採集に出かけました。植物についての知識も豊富で、小学校3年生の時からクリスマスでサンタクロースへのお願いが「植物図鑑」、これには恐れ入りました。また、眼力も物凄く、今日の目標は「クモラン」と言えば、そのとたん今まで凭れ掛っていた「ソメイヨシノ」に着生している「クモラン」を発見、結局その後の調査で横倉山の林道沿いの「ソメイヨシノ」11本で「クモラン」の着生を確認したり、南遊歩道（“四国のみち”）を歩けば「ツルシキミ」の中から「コショウノキ」を、三角点では「ウメガサソウ」や「アカガシ」の巨木に着生する「ヤシャビシヤク」、安徳天皇陵墓参考地の横の落葉の中からも簡単に「クロヤツシロラン」の花（これはそう簡単には見つかりません）を、また意外な場所での石灰岩の割れ目で「イチヨウシダ」を三株見つけてくれたり、本当に名サポーターとして調査を手伝ってもらいましたが、残念なことに高校1年の夏休み、アルバイト中に思いがけない水の事故に遭い山歩きができなくなってしまいました。もう一度一緒に植物調査をしたいものだと、1日も早い回復を祈るばかりです。

（おおくら こうすけ／元中央高等学校教頭）

# 牧野富太郎博士の愛したジョウロウホトトギス

安井 敏夫

牧野富太郎博士が高知県横倉山で最初に発見・命名した『横倉山タイプ植物』の一つに、ユリ科の「トサジョウロウホトトギス」[写真]がある。学名：*Tricyrtis macuranta* Maxim.で、ロシアのマキシモ・ヴィッチ博士が命名し、和名を牧野博士が命名した博士のお気に入りの植物であつたらしく、光沢のあるみずみずしい濃い緑色の葉と半鐘状のレモン色の花のコントラストが実に美しい植物である。それもそのはず、和名：「上臈」の由来は、かつて宮中に仕えた貴婦人(身分の高い女官)を意味する。

トサジョウロウホトトギスは、高知県内では、横倉山と佐川町、津野町(旧葉山村)の3ヶ所でのみ自生するが、どこもその数は極めて少なく絶滅危惧種に指定されている。いづれも石灰岩地を好む“石灰岩植物”であるが、おもしろいことに自生している石灰岩の年代が地質学的にそれぞれ異なっている。すなわち、地質区としてはすべて秩父累帯ちちぶるたいに属するが、横倉山よこくらやまのものは日本最古の4億2500万年前の石灰岩〔古生代シルル紀〕に、佐川町さかづかのものは1億5000万年前の鳥ノ巣石灰岩〔中生代ジュラ紀〕に、そして、旧葉山村ふるはやまのものは2億2500万年前の石灰岩〔中生代三疊紀〕である。



日本には、トサジョウロウホトトギス(ジョウロウホトトギス)に類するものに、キイジョウロウホトトギス(和歌山県)、スルガジョウロウホトトギス(静岡県)、サガミジョウロウホトトギス(神奈川県)があるが、博士は中でもトサジョウロウホトトギスが“美しい”と感じていたようである。その一つの証拠として、博士の横倉山産のトサジョウロウホトトギスのスケッチ〔『日本植物志図篇』(明治21年)〕の欄外に「紀州那智にも同種あれど品種は土佐の者に劣れり」と記されている。

ところで、広義のジョウロウホトトギスは、一般には“石灰岩植物”(少なくとも高知県では)であるが、トサジョウロウホトトギス以外の三種

は一体どのような土壌・岩場に自生しているのか以前から関心があった。というのは、和名の地名からして、地質学的には石灰岩の分布しない場所だったからである。いろいろ調べた結果、次のようなことがわかった。

キイジョウロウホトトギスは、紀伊半島南部にしか見られず、かつては和歌山県古座川流域を始め三重県にかけての熊野の山中の崖に多く自生し、“山里の貴婦人”と呼ばれていたようであるが、乱獲などでその数が激減し、絶滅に瀕していると言う。地質学的には、四万十帯中に貫入、噴出した熊野酸性火山岩類〔新生代新第三紀中新世〕の

分布域に数カ所自生する。次に、スルガジョウロウホトトギスは静岡県富士宮市天子山地の最高峰たけ毛無山(1946m、日本300名山)に自生し、後述のサガミジョウロウホトトギスよりもさらに小型の変種である。本地域は、フォッサ・マグナ南部地域の中新世の火山～深成岩類から成る地帯に属する。やはり、絶滅が心配され、深刻な状況にあるらしい。最後に、サガミジョウロウホトトギスは、神奈川県丹沢山地に自生し、“丹沢の貴婦人”と呼ばれている。1957年に神奈川県丹沢山地の塔ヶ岳で最初に発見

され、翌年の58年にスルガジョウロウホトトギスが発見された。スルガジョウロウホトトギスとは富士山を挟んだ東側の同じフォッサ・マグナ南部地域に位置し、ほぼ同時代の火山岩類(一部深成岩)を主体とする地域に1ヶ所のみ自生するようである。後の2種は、紀伊半島のキイジョウロウホトトギスの分布域から遙か隔たった場所から発見されたことから学会からも注目されたようである。

結局、ジョウロウホトトギス(広義)は、トサジョウロウホトトギスのみが石灰岩地に自生し、その他の3種類は必ずしもそれに限定されないということが判明した。この原因は一体何によるものなのだろうか。単なる偶然なのだろうか？

(やすいとしお／横倉山自然の森博物館副館長兼学芸員)

## 博物館ニュース

### 企画展：『西村洋一画文集—風を紡いで—出版記念展』 〔2007年3月24日(土)～5月6日(日)〕

若くして不慮の事故に遭い車椅子の生活を余儀なくされた画家・西村洋一氏(旧窪川町出身)。手足の自由がほとんど利かないという重度の肉体的ハンディを背負いつつも、それに屈することなく、独自の描写法を考案し、それを感じさせないほどの繊細なタッチの水彩画を描き続け、いつも観る者に感動と夢、そして生きる勇気を与えてくれる。

今回は、第三作目の画文集『風を紡いで』の出版記念として、“風”をテーマとした新作を含む作品約35点を展示。作者の想いととも、故郷の美しい自然の中に、懐かしい思い出の世界に浸って頂ければという願いから開催。

「二度と戻る事の無い時は、帰り来ぬ“風”です。そんな自分の確かに在った一瞬の“風”、私はこれからも紡いで行きたいと思っています」(2006, 西村洋一)



画文集から抜粋したエッセイ(10点)も感動的で、たくさんの感想が集まった。「感動して涙が出ました。ありがとうございます。これからは自分にもっときびしく生きようと誓いました」「新緑の美しい会場でステキな絵を楽しませていただきました。…あなたの画集をおみやげに連れて帰って、皆に見せます。きっと元気がでるでしょう!…ありがとうございます」(リウマチ友の会)。また、会場内に設置したノートの1ページに記された中学生の一節がとても印象的であった。「最近嫌なことばかりでとてもしんどかったけど、この絵を見ていると嫌なことを忘れました……」。

### 〈安徳天皇が幼少の頃遊ばれた和独楽再現〉

安徳天皇が幼少(推定八歳)の頃、「<sup>りゆうこ</sup>輪鼓」と呼ばれる和



富永将照氏(右)と織田義幸・越知平家会会長

<sup>ごま</sup>独楽を廻して遊ばれる珍しい<sup>みえい</sup>御影(模写)が京都の長楽寺に残されている。

この度、その輪鼓が富永将照氏(京都市左京区)の仲立ちによって複製され、「越知平家会」に寄贈された。製作したのは、京こま匠・雀休(中村佳之氏)〔京都市右京区〕で、<sup>しん</sup>柄を材として漆をかけた『本漆塗り独楽』で、<sup>けまじり</sup>燃紐が付いている。協賛として手毬も製作された(箆島トドリ氏・福岡県久留米市)。作品には、京都市内の神社仏閣等のほとんどの「<sup>まふだ</sup>駒札」(説明版)を手がけている山本義之氏の書による説明文も付いている。作品の製作に要する費用の寄付に関しては、越智汀祐氏(愛媛県西条市)ほか有志によるもので、いろんな方々による御好意によって越知町に新たな資料が追加された。

寄贈戴いた輪鼓は、越知平家会から横倉山自然の森博物館に寄託され、現在安徳天皇の御影のパネルのそばに展示されている。

### 〔草木染め教室〕

2007年4月28日(土)〔参加者：大人10名、講師：西峯久美(草木染め作家)〕

今回は、桜の木を使って、絹のストール作りを行った。生地に板片や割り箸を当てて固定したり、輪ゴムを巻いて絞ったりして、各自いろんな柄・紋様を入れた。出来上ってみると、幾何学的な模様や芸術的な模様が現われ、各自のご自慢のお洒落なストールができた。染め上がりの色は、鉄媒染では灰色に、アルミ媒染では黄色に染め上がる。

### 〔<sup>いなむらやま</sup>稲叢山アケボノツツジ観察会〕

2007年5月3日(木・祝)〔参加者：大人22名・小人2名・犬1匹、講師：恒石直和(植物研究者)〕

今年の友の会恒例の春の植物観察会は、旧本川村と土佐町の境に位置する稲叢山〔1506.2m〕に分布する、県下でも有名なアケボノツツジの自生地に行くことにした。

稲村トンネル南口の登山口から、ヤマザクラの花がまだ少し残っているさほどきつくない登山道をウグイスのさえずりを聞きながら歩いて行く。途中、点々と自生する推定樹齢200～300年の古木にピンク色の花を付けたアケボノツツジや真っ白い花を咲かすタムシバ〔モクレン科〕を見ながら1時間20分ほどで山頂に到着した。山頂近くの尾根には、



まだ芽吹きはしていないブナの中木(“ブナのトンネル”)やつぼみを付けた推定樹齢400~500年のシャクナゲの古木の小群生がある。山頂につくと、ほぼ満開のものやまだつぼみのアケボノツツジが迎えてくれ、眼下にはロックヒルダムの稲村ダムを見下ろすことができる景観の素晴らしい山である。

ちなみに、稲叢山は、一説では安徳天皇と平家一門が、屋島の檀ノ浦の戦いで四国に上陸後、愛媛県と高知県の境界の四国山地の一角・平家平〔1692.6m〕から移って来た場所とされ、安徳天皇潜幸ルートの一つに挙げられている場所である。

### 《呈茶》

2007年5月5日(土・祝)

今年が博物館開館10周年記念ということもあり、昨年に続き博物館の3階展望ロビーにおいて、来館者に抹茶と和菓子の無料サービスを行った。

いつものように、越知町文化推進協議会(文推協)の茶道クラブのメンバーの協力を得てささやかなおもてなしをすることができた。天気予報による雨が心配されたが、幸い薄曇で何とか天気が持ち応えてくれ無事終了することができた。

### 《創作能『横倉山』の台本完成》

今年の初夏、新作の能：『横倉山』が、高知県生まれの邦楽作家・大江隆子氏(鎌倉市在住)の手によって完成した。

源平の戦いに敗れ、ここ越知町横倉山に潜幸し生涯を終えた(山中に「越知陵墓参考地」在り)という地元の伝承に基づく「安徳天皇」を題材(主人公)とするもので、これまで平家物語から題材を得た能(例：『平 知盛』、『平 敦盛』など)は多くあるが、安徳天皇に関するものはこれが初めてである。

安徳天皇は、世界的な植物学者・牧野富太郎によって横倉山で発見・命名された美しいユリ科のトサジョウロウホトトギスを手に持って現れ、また、「アイ狂言」では、越知町内でよく見つかるオオサンショウウオ〔国の特別天然記念物〕が語り部として登場するなど、越知町の地方色の濃い能となっている。

現在、上演に向けてスポンサー、協力者を募っているところである。

### 〔博物館教室〕

#### 《昆虫》

〔2007年7月29日(日)、参加者：子供、指導者：山崎三郎(高知県自然観察指導員)、助手：2名(高知アサギマダラネットワーク)、協力：中江産業株式会社〕

昨年に引き続き、今年は場所を寒風山南麓に変えて、日本三美蝶の一つで“渡り蝶”として有名なアサギマダラのマーキングを行った。

アサギマダラについては、不思議な点や不明ことが多い。また、アサギマダラが好むフジバカマ科のヒヨドリバナ(ヨツバヒヨドリ)やフジバカマのみつの中に含まれる毒成分：



PA(ピロリジン アルカロイド)を摂取することにより鳥から身を守っているという。生態もあまりよくわかっておらず、高知県内でマーキングすることは、アサギマダラの飛行ルート、県内での生活を知る上で大切である。

今回の場所は、<sup>ひのき</sup> 桧の植林を伐採し新に幼木を植林した緩傾斜地(所有者：中江産業株式会社)で、ヒヨドリバナがたくさん咲いており、多くのアサギマダラが見られる(昨年は1日で約1000頭確認)ことからここを選んだ。当日の気温は26℃で、26℃以上になるとアサギマダラが活動できないというギリギリの条件であった。

最高11頭のアサギマダラにマーキングをした家族もいた。今回採捕・マーキングしたアサギマダラが次に何処で確認されるか、情報を待つのが楽しみである。アサギマダラの渡りのルートはまだはっきりと解明しておらず、子供たちがそのことに科学的な面から関与していることに意義があると言える。

### 《植物》

〔2007年8月4日(土)、参加者：子供7人・大人5人、指導者：恒石直和(横倉山自然の森博物館審議委員・前高知市子ども科学図書館館長)〕

今回は、横倉山第3駐車場から杉原神社までの遊歩道沿いに広がる“アカガシ原生林”中の植物について学習しながら植物の名前や由来、特徴等を学習する。

一例を挙げると、ノリウツギ〔ユキノシタ科〕は、別名：<sup>のり</sup> 糊の木で、古文書の紙の材質である土佐和紙をすく時の糊に使用されるという。また、“モミジ”はカエデの俗称で、実際に「モミジ」と名の付くのはカラスモミジ(横倉山にはない)だけであるという。



杉原神社には推定樹齢500～600年の大杉が林立するが、本殿脇にあった四国有数のモミの巨木が一昨年に危険回避のため伐採され、その切株を利用して、年輪の幅から過去の気候の変化を推測し、同時に、その時期時期に日本でどのような事件・出来事が起こったのかについて学習した。

中心部が腐って空洞になっていたため、樹齢(推定400～500年)すべてをカバーできなかったが、160年前くらいまで遡って調べることができた。少なくとも1840～1877年〔西南戦争勃発〕頃までは、年輪は、淡い部分(春～秋に形成)と濃い部分(冬に形成)の幅は粗く、特に冬場の成長幅が広く温暖であったことが推測されるが、それ以降は共に幅が半分以下になり、気候が寒冷化したことが推測される。

ちなみに、木の年輪の粗密のパターンから古い建造物の建築用材の年代を割り出す「年輪年代学」と呼ばれる方法があるが、その場合の杉材の基準資料になるのが、高知県の魚梁瀬杉である。

## 《 工作教室 》

〔2007年8月11日(土)、参加者：子供17名(内幼児2名)・大人14名、指導者：村田國翁(大阪薫英女子短期大学非常勤講師)〕

今回も昨年に引き続き『オリジナル万華鏡』作りを行う。今回は3回目とあって、ほとんどの子供が1時間ほどで仕上げていた。水のり：水＝1：1の石鹼水の入った試験管に各自好きないろんな形や大きさの、色とりどりのビーズを入れ、筒に各自好きな模様の紙を貼って、正に自分独自の“オリジナル”な万華鏡が仕上がった。ビーズの量と色の配合がポイントのようだ。通常の万華鏡と違い、模様は独りでに変化し、夢があって本当にいいものである。

余った時間で、“ひっこみじあん”と呼ばれる、紙筒と何本かの紐を使ったマジックグッズを作る。さらに、今流行りの衣類のはぎれで編んだ草履の作り方の指導も受けた。



## 《 化石教室 》

〔2007年8月19日(土)、参加者：子供11名・大人9名、指導者：安井敏夫(横倉山自然の森博物館学芸員)、協力：友の会会員1名〕

今回は、佐川町川内ケ谷の林道沿いにおいて、中生代三畳紀の示準化石であるモノチス〔*Monotis* (*Entomonotis*)〕の化石の採集を行う。

モノチスは、楕円ないしは半月形の左右非対称の不等殻



をもった二枚貝で、顕著な放射肋をもつ。殻は薄く、皿型をしているため“皿貝”とも呼ばれ、ホタテガイの先祖型に当る。砂質泥岩～細粒砂岩中によく密集して産し、化石層を形成する。恐竜がまだ繁栄しないノーリアン階〔Norian階：2億2000万年～2億900万年前〕と呼ばれる時代に極めて特徴的で、特に、南北アメリカ、シベリア、日本、オセアニアなど現在の太平洋を取り巻く「環太平洋地域」に豊富に産する。中でも、日本産のものはシベリアとの間にかかなりの共通種が含まれており、シベリアとの関連性が認められる。

ところで、佐川・越知周辺では、ここのところ化石教室・化石採集会といった観察会を開催するのに適した場所がほとんどなくなってしまい、今後教室が継続できるかどうか微妙になってきた。子供たちに、自らの手で化石を採集する機会を提供し、科学する楽しみを味あわせてあげることが、科学の芽を育てる意味では望ましいことではあるが…。

## 「夜の昆虫観察会—桐見川小学校キャンプ—」

〔2007年8月11日(土)、参加者：友の会会員5名・一般30名・事務局等9名、講師：山崎三郎(高知県自然観察指導員)、共催：NPO法人四国自然史科学研究センター〕

昨年好評だった、交流キャンプを兼ねた夜の昆虫観察会を行った。

## 「スターウォッチング4—夏の天の川とこと座—」

〔2007年8月10日(金)、参加者：大人13名、講師：片岡重敦(前横倉山自然の森博物館館長)〕

環境省と(財)日本環境協会が主催する、全国星空継続観察事業の一環として昨年に引き続き行った。

## 企画展：『南極—その神秘と魅力—』

〔2007年7月21日(土)～9月2日(日)、協力：国立極地研究所、国立大学法人高知大学、資料提供：WWFジャパン、全国地球温暖化防止活動推進センター(JCCEA)、環境活動支援センター えこらぼ、社団法人日本自動車連盟、高知地方気象台〕

日本の南極観測50周年に合わせ、“氷の大陸”・南極大陸の神秘と魅力について、約40億年前の地球創世期の岩石、月・火星のイン石、動植物の化石、ペンギンの剥製、オーロラの写真映像等で紹介。南極の氷に触れられるコーナーも設置。オゾンホールや地球温暖化など地球環境に関するパネル約



40点も同時に展示し、地球温暖化の実状、影響についての認識を深めてもらう。

子供たちには、数万年前の南極の空気が閉じ込められた氷が一番興味があったようであるが、かつて南極大陸にも植物が繁茂し、ある程度四季の変化があったことを示す年輪をもった約2億年前の樹木(針葉樹)の化石・珪化木や暖かい海域に生息する5億年前の動物の化石など、南極大陸にもかつて暖かい時期があった(正確には低い緯度にあった)ことを示す化石の証拠は意外であったことであろう。

また、高知県内には、越知町横倉山や高知城の立つ大高阪山を形成する岩石が、約4億年昔には、オーストラリア大陸や南極大陸の近くにあつて、超大陸「ゴンドワナ大陸」を構成していたというロマンも味わってもらった。

企画展の感想の中には、「地球温暖化について興味をもちました」、「地球温暖化現象が少しでも緩和できることを身近なことからやろうと考えさせられました」、「南極の氷がさわられて良かった。自然の大切さを感じた」などがあった。深刻な地球環境に関心を示してくれたことは有り難い。

なお、7月29日(日)には、越知町民会館大ホールにおいて、元南極観測隊員の国立大学法人・高知大学理学部の吉倉紳一(地質学)、石川慎吾(生物学)2名の教授を講師



に招き、講演会を開催。南極から見た地球の歴史やペンギンの生活と南極海の生態系について実際の体験に基づいた生(なま)の話の聞き、南極に関する知識を深めてもらった。

### 「観月会」

〔2007年9月27日(木)、博物館3階展望ロビー、協力：博物館友の会〕

以前来館者の方から、展望ロビーは眺望がいいので中秋の名月の夜博物館を開放して欲しいという要望があり、かねてからそれに副(こた)えられるようにと思っていたが、開館10周年に合わせて今回やっと実現した。



壺にススキを生け、月見だんごを供え、足元には竹の筒にローソクの火を灯したほのかな明かりを並べてムード造りを行い、越知盆地の小高い山から昇ってくるオレンジ色の満月に歓声を上げながらしばらく見入った。途中から、クラシックギター(佐川・高知ギタークラブ:12名)とマーダル(友の会会長)の演奏を聞きながら、夜空に浮かぶ白くなっていく満月を観賞した。

俳句と短歌の歌詠みも行い、人気投票で優秀作品を決め、賞品として青白い閃光を放つ「ラブラドライト(“ムーンストーン”)」を進呈した。

開館10周年にふさわしい、思い出に残る観月会となった。

## 横倉山ミニ歳時記

### ■横倉山系の白花のオンツツジ

越知町上ノ峠地区あげのとうに珍しい白花のオンツツジがある。40年以上も前に、地元の西森徳光さん(74歳)が上ノ峠地区に通じる道と林道横倉山線との分岐点から南へ行った北斜面の岩場(赤色チャート)に一本だけ自生していたものを、自宅の庭に移植したものと云う。樹高は2.2m、直径1~3mmほどの幹が10本地表付近の根元から分かれた格好になっている。

長い毛のある先の尖った葉が3枚、めしべ1本、おしべ10本(稀に8本)で、共に上方に緩く湾曲している。花弁は5枚で、下の2枚がやや長く大きく、花は3輪(稀に4輪)と、オンツツジの特徴を備えている。

以前、同じ横倉山系の別の岩場(4億年前の花崗岩地域)に2株自生していた白花のトサノミツバツツジの内の1本を、高知市五台山の牧野植物園の職員が見つけて園内に移植したものと云うが、いずれにしても極めて珍しい品種である。

余談ではあるが、上ノ峠のものが自生していた岩場には、安徳天皇の従臣「丹後侍従 平忠房」を祭る小祠がある。



## 〔博物館日誌(抄)〕

- 3月25日(土) 第11回博物館協議会
- 3月24日(土)～5月6日(日)  
企画展：『西村洋一画文集―風を紡いで―出版記念展』
- 7月21日(土)～9月2日(日)  
夏休み企画展：『南極―その神秘と魅力―』
- 7月29日(日) 夏休み博物館教室〔昆虫〕
- 8月4日(土) 夏休み博物館教室〔植物〕
- 8月11日(土) 夏休み博物館教室〔工作〕
- 8月19日(日) 夏休み博物館教室〔化石〕
- 9月27日(木) 『観月会』(博物館3階 展望ロビー)
- 9月22日(土)～11月4日(日)  
開館10周年記念写真展：『月影の森』
- 12月8日(土)～2月9日(日)  
企画展：『昔懐かしい越知町の写真と引札展』

## 〔博物館友の会「フォレストクラブ」の平成19年度の活動予定〕

- 4月15日(日) 旧松山街道を歩こう

- 4月28日(土) 草木染め教室
- 5月3日(木・祝) 稲叢山―アケボノツツジ観察会―
- 5月5日(土・祝) 呈茶(博物館3階展望ロビー)
- 5月22日(火) 友の会運営委員会
- 5月26日(土) 友の会総会
- 6月9日(土) 仁淀川水質調べ〔身近な水環境の全国一斉調査〕
- 6月27日(水) ヒメボタル観察会(横倉山杉原神社)
- 8月10日(金) 夏のスターウォッチング―夏の天の川とこと座―
- 8月11日(土) 夜の昆虫観察会―桐見川小学校キャンプ―
- 8月28日(火) 夏の星空観察会―月食―
- 9月24日(月・祝) 秋の横倉山ハイキング―三嶽古道―
- 10月27日(土)、28日(日) 安藤建築を訪ねて―成羽町美術館と巖島神社(国宝・世界遺産)の旅―〔泊2日〕
- 横倉山遊歩道整備―三嶽古道標識設置―
- 12月 炭焼体験
- 12月16日(日) 手作りキャンドル教室
- 2008年1月1日 横倉山畝傍山眺望所で初日の出を
- 1月 冬の星空観察(博物館3階展望ロビー)

## スタッフの声、声、声

〔西森〕朝夕めっきり涼しくなりました。広葉樹からは、役目を終えることを告げるかのように枯れた木の葉が舞い落ちます。久しぶりに早起きをして、西の空を見上げると、晴れ間にくっきりと稜線を描いた横倉山が見え、いつみても形の良い山だと思う。朝日を浴び、山の緑が映える四季折々に様子が変わる。7月15日だったと思うが、台風の翌朝の7時30分頃博物館付近から南に大きな弧を描いて虹が出ていた。虹が架かった横倉山、これもまたいいものだと思えた。

〔西川〕秋の夜空、満月を望遠鏡で見ると驚くほど大きく光り輝いている。クレーターも砂漠のように広がる大地もはっきり見える。でもちょっと寂しい気がする。望遠鏡がない時代には、もっと夢が見れたのに…。秋の里山、木の実や果物など動物たちの食べ物がいっぱい。ツガニ汁、栗ごはん、里芋の田楽等美味しい食べ物がいっぱい。秋はお腹がいっぱいになる季節。

〔安井〕今の世の中あまりにも信じられない事件や腹立たしいことが多いが、ここ2、3年位前からであろうか、世の中の万物(自分の肉体や生かされていることにも)に対して“感謝”の気持ちをもつようになったような気がする(歳の所為であろうか?)。博物館に遠くからわざわざ企画展を観に足を運んでくださるお客さんに対してもちろんそうである。素晴らしい「もの」、「人」に出会った時、“生きてて良かった!”と思うことがある。今はそれが私にとっての生き甲斐の一つである。

〔小松〕横倉山遊歩道沿いをヒキガエルが歩いていた。久しぶりに見るニホンヒキガエルは、随分とやせているのでかわいそうに思えた。カエルのほうも僕が久しぶりならば、そんなに太って、哀れに思ったかもしれない。秋なのでしょうがないがよ。そんなことを気にせず冬の前にたくさん食べなさいと思った。

〔伊藤〕博物館10周年記念写真展『月影の森』を開催し、カメラマンの高橋宣之さんに初めてお会いしました。写真展が始まってから連日横倉山に登られ、高橋さんは特に光るキノコに魅了されているようでした。夕方博物館に寄られたときに、「今日はキノコに水をやってきました。キノコが喜ぶんですよ…」とっておられとても楽しそうでした。会場にもその光るキノコの写真を展示することが出来ました。私も友の会の観察会時にそのキノコを夜見しましたがとても小さいのに幻想的でした。

〔小野〕今年5月、空を見上げるととても不思議な光景を目にしました。太陽から太陽を繋ぐように雲が円を描いていて、まるで大きな指輪のようでした。円の途中2～3ヶ所は、虹のような色がボヤッとながらも見えていました。調べてみると「日の傘現象」というのがあったのですが、日の傘現象は太陽を中心としてその周りに雲の円ができるらしく、自分が目にした現象とは少し違うようでした。見る場所によって偶然太陽から太陽を結ぶ円に見えただけかもしれませんが。言うまでもなく、初めて見たその光景に圧倒されてしまいました。

高知県越知町立

**横倉山**  
自然の森博物館



〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知内737番地12  
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620  
E-mail: yokogura@town.ochi.kochi.jp  
http://www.town.ochi.kochi.jp/

- 開館時間：午前9時より午後5時まで  
最終入館は午後4時30分
- 休館日：毎週月曜日(祝日の場合は翌日)  
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料：大人……………500円(※各20名以上)  
高校・大学生……………400円(上の団体は100円引き)  
小・中学生……………200円
- 越知への交通  
高知 ― JR特急 約30分 ― 佐川 ― バス 約15分 ― 越知  
JR普通 約50分

